

Max Müller 管見

—言語研究史からみて—

櫻井 美智子

§ 1 はじめに

周知のように、わが国の言語学においては、19世紀後半になってようやく西欧的方法による研究が移入されたのであった。ただし、古来仏教との連関から、サンスクリットの語学的研究はその分野においてながく継続されていたのである。南條文雄博士（1849—1927）および高楠順次郎博士（1866—1945）によってそのころ著しく発展をとげたサンスクリット研究は、この様なわが国の言語研究の状況のもとで、まさしく時機到来といつてよからう。Max Müller は、この2人の先達が Oxford で師事し、また共同研究をも行った人である。かれの歿後その蔵書のすべてがマクス・ミュラー文庫として東京大学に収められたが、不幸にして関東大震災で東大図書館とともに焼失した。したがってこの文庫はわずか20年しか存続しなかったが、その間これを利用した人々は決して少くなかったと察せられる。こうして Max Müller がわが国の言語学発達史上果たした役割は、さほど大きくはなくても無視できないとおもわれる。豊富な資料ではないが、些か集めた断片から、かれの役割を知るのも無駄ではなからう。

まずかれの人となりを少し詳しく紹介したい。Friedrich Max Müller は1823年12月6日ドイツの桂冠詩人 Wilhelm Müller とその妻 Adelheid との間の一人息子として Dessau に生まれた。4歳にならぬうちに父を失い、1836年迄故郷の grammar school に通っていたが、早くから音楽の才能を示し、Felix Mendelssohn や Carl Maria von Weber などの作曲家たち

と交り、一時は音楽家を志望していたこともあった。かれの名 Max は、godfather である Mendelssohn がかれの誕生直前に作曲しおえた *Feischütz* の主役の名にちなんで名づけたといわれる。1841年春、Leipzig 大学に入学を許され、ここで Hermann Brockhaus からサンスクリットをとるようすすめられ、20歳でサンスクリット寓話集 *Hitopadésa* の翻訳をするまでになった。Leipzig で Dr. phil. を取得、1844年春 Berlin に行く。ここで印欧語比較文法で比較言語学の基礎をうちたてた Franz Bopp の指導を受け、比較言語学を学んだ。同じ大学の教授であった F. W. J. von Schelling はかれに哲学にも興味をもたせた。1845年3月 Paris に移り、そこでサンスクリット学者であり、又、当時の最初の古代ペルシャ語学者であった Eugène Burnouf の影響を受けるようになる。この時のちに Veda 言語学の創設者となるドイツの東洋学者 Rudolf Roth や古典サンスクリット学者として著名な Theodore Goldstücker と共に学んでいる。又 Burnouf のすすめで、若き Max Müller はアーリア民族最古の文学碑でありバラモンの聖典の最も大切な *Rig-Veda* 初版の資料蒐集を始めた。1846年 London 駐在プロシヤ大使 Baron Bunsen への紹介状をもってイギリスに渡る。Baron Bunsen と Horace Hayman Wilson はかれを東印度会社に推薦し、費用を会社負担で *Rig-Veda* を Sāyana の注釈つきで刊行するよう委任した。又 Bunsen といっしょに1847年6月 British Association の会合のため Oxford を訪れ、ベンガル語とベンガル語のアーリア語族との関係について講演した。*Rig-Veda* 第1巻の刊行が大学出版局でされていたので、かれは Oxford に移ることが必要と気づき、1848年5月ここに移り、ついにかれの一生をここで過してしまふことになる。1850年近代ヨーロッパ諸語の Taylorian 代理教授に任命され、1854年には正式の教授になった。主にドイツ語とフランス語について、又ロマンス諸語の構造等について講義をし、1856年から1863年までと1881年から1894年まで Bodleian 図書館長にえらばれ、1858年には All Souls' College で life fellowship にえらばれた。

1859年 Riversdale Grenfell の娘 Georgiana Adelaide と結婚。同年

History of Ancient Sanskrit Literature を出版した。1860年5月に Oxford のサンスクリット教授 Horace Hayman Wilson がなくなった。後継者にはその能力や業績からみて Max Müller が有力候補であったが、Haileybury の East India College で1858年までサンスクリット教授であった Monier Monier-Williams に 833 票対 610 票で敗れた。これがかれのそれ以後の研究方向を変えることになってしまった。というのは、それまで約20年の間かれの主たる知的興味はサンスクリット研究に向けられていて、もしかかれがこの時成功していれば、かれの活動は好きなサンスクリットに限られてしまったとおもわれるからである。そののちかれはかなりの関心を比較言語学にそそぎ、1861年と1863年には Royal Institute で2つのシリーズで言語学講義をしている。これはイギリスにおいて比較言語学に一般の関心をひきつけた最初のものであったばかりでなく、当時学者たちの研究に刺戟を与える貴重な影響を及ぼすこととなった。1868年 Taylorian の椅子があくや、かれのために開設された比較言語学の新しい教授として任命され、(1875年に実際には引退していたが)死ぬまでこの椅子を保っていた。かれの選挙の4年後、新しく創設された Strasburg 大学でサンスクリット教授に招かれた。かれはこれを断ったが、1872年の夏学期に1コースもつことに同意している。

かれが比較言語学をイギリスに導入したばかりでなくさらに比較神話学や比較宗教学においてもこの国の開拓者と目されるのも、また上記の人事上の挫折が出発点となったといえるかもしれない。かれの生涯の後半の30年間は比較宗教学に捧げられ、多くの著書が遺っている。また1870年 Royal Institute において宗教学について4つの講義をなし、1873年と1878年には Westminster Abbey において、1880年から1892年の間は Glasgow 大学で Gifford lecturer として、それぞれ宗教学講義を行っている。その他 *Sacred Books of the East* 等を編集者として Oxford University Press から刊行したが、51巻から成るこのシリーズには最も初期の印度の法律に関する著作や宗教儀式についてのものなども含まれ、法律や慣習の比較研究には貴重な資料になっているといわれる。しかも一方ではまた多方面にわたってサンス

クリット研究を促進し、1873年に *Rig-Veda* を終え、その他サンスクリットのテキストなど教育書やサンスクリット作品の翻訳、サンスクリット文学に関する講義などを出版している。この *Rig-Veda* の仕事はかれの名をサンスクリット学の歴史にいつまでもとどめるものである。更に、Max Müller がその貴重な時間の多くをさいてサンスクリット学徒を指導し共同研究をした中に、3人の若い日本人留学生がいた。その1人南條文雄博士は1882年何万冊という仏教徒のサンスクリット本のシナ語カタログを訳し、笠原研寿氏⁽²⁾ はサンスクリット仏教用語のリストを編集、3人めの高楠順次郎博士はかれのすすめで1896年に紀元671年から690年の間に印度を訪れた巡礼の旅をシナ語から翻訳した。

Max Müller は父から受けついで文学的才能があったので、生まれも教育も外国人でありながら秀でた英語の文体で多くの雑誌に寄稿し、これは4巻からなる *Chips from a German Workshop* に収録され、又亡くなる直前に刊行された *Auld Lang Syne* にはかれの追憶が非常に美しく描かれている。1857年の *Deutsche Liebe* にはかれの情緒の詩的味わいがよくあらわれ、各国語に訳されている。

かれは1899年6月ドイツ訪問中重い病気で倒れたが驚くほどの回復をみせ、翌1900年10月28日 Oxford で亡くなるまで、文筆活動を続けた。同年11月1日 Oxford の Holywell 墓地に埋葬された。

かれの世界的名声は、その偉大な能力を野心的な勤勉さで発揮しながら、稀な文学的才能による広範囲な著述に負うのである。しかしそれは誰にでもそうめったに訪れないであろう好機の組合せでより高められたとも思われる。つまり、第一にかれがその仕事を始めた時 Veda 研究はまさに揺籃時代であり、古代印度文学の最も重要な作品である *Rig-Veda* の最初の編集者になるという好運に恵まれた。又かれがイギリスに渡った時、この国ではまだ比較言語学について何にも知られていなかったもので、この分野での開括者として新しい学問を導入普及し、第一人者と見なされたのである。更にこの国で比較神話学の研究を始めた最初の学者であり、第四には19世紀後半まで宗教

学は言語の上でも研究方法においても未開発の分野であったため、かれの語学の才能とその比較方法が十分に活用されたのである。しかし Max Müller の様な19世紀の最も多才な学者の一人といわれる人物でなかったならば、これらすべての好機を利用することは出来なかったであろう。現時点からみるとかれの業績は既に殆ど超克されているが、かれの著作が上にあげた様々の分野に大きな影響を及ぼしたことは、後代の人々に銘記されてよいとおもう。

§ 2 Max Müller の言語観

Max Müller はかれの *Lectures on the Science of Language*⁽³⁾ の中で、August Schleicher の「言語学は自然科学の一つである。その方法は概して他の自然科学のものと同じである」⁽⁴⁾ という見解と同じ立場をとるといっている。Max Müller によれば言語は人間の作品 (Language is the work of man)⁽⁵⁾ であり、身ぶりや表情だけで不十分な時思想交換のてだてとして発明されたものである。言語は他の自然科学が取扱うものと異なり、絶えず変遷するという歴史的变化を伴うが、如何なる人間といえどもこの変化を生ぜしめたり阻止したりすることはできない。意の如く言語の法則を変えたり新語を作ったりというようなことは、血液の循環を制御する法則を変えようとしたり身長を好きなように伸ばそうとするのと同じようにできないこと⁽⁶⁾ で、これは自然界の理に従っているのである。言語が人々の好みや想像、才智によって変化されたり破壊されることがないということが真実であっても、言語が変化するのはこれを運用する人間によってのみ起る、ということもまた真実である。新語や文法上の新しい形式が作りだされる時、その主な動因は個人ではあるが、その個人性が既にその属する家族とか部族とか国家という共同行動に併合されたあとにおいてのみである。そしてあらゆる言語運用は相互理解とか共同行動の慣習というものにかかって来る。どの言語運用者にも、習得された慣習によって形づくられる相互理解の絆や共通の用法が、言語を構成する言葉を運用する時に適用される。以上が Max Müller の根本

的見解である。これは言語学における最も基礎的な事実の一つであろう。

またかれはその著作の多くの箇所、思考と言語は同一であり、推理は言語を唯一のてだてとして運ばれる思考であり、推理は言語や記号なしには不可能である、ということを行っている。そして子供は言語習得前に甘さと苦さを識別することができるが、ニガヨモギとボンボンが同じものでないことを知るのにはしゃべられるようになってからである、という例証をあげている。⁽⁷⁾つまりニガヨモギがボンボンでないことを知るのは言葉のてだてによるのみということであるが、甘さとは何かということについては、これは主観的な味覚の問題であって、大人であってもこれを定義することはできないし、かれのいうように、この様な例から言語と思考が分ちがたいものであるということはいえないであろう。

Max Müller は Schleicher の思想に多少手を加えた形で解釈しているとみられる。即ち、言語の過去は歴史的な事象として見るべきでなく、あらゆる自然現象に共通なおのづからなる成長過程と見るべきである、とした。そして言語学 (the Science of Language) は human speech を扱う学問であるから自然科学の中でも最も高い位置にあるというのである。The Science of Language は言語そのものを扱うが、Philology は文献を扱うので歴史科学とし、古典的言語学も歴史科学とした。言語学を自然科学とみる考えに今日では余り抵抗がないであろうが、Philology 全盛の時代に the Science of Language を他と区別した点、今日の Linguistics とそのままおきかえることはできないまでも 100 年前の見識として注目に価するといえないであろうか。しかしかれは依然言語を自然現象と共通な自ら成長するものとみていて、個人が生まれた後に習得する社会習慣によるものであるという考えにはいたらなかった。又かれは言語と思考との直接的なつながりは話しことばの現象に極めてはっきり表明されると判断したが、これは20世紀になって言語学が話しことばに脚光を浴びせるようになった事実と考え合わせ、興味深くおもわれる。

§ 3 言語の発達における変化——方言の発生と音韻変化

言語を生物学的自然主義のみかたで成長するものとみる Max Müller は、その歴史的変遷がむしろ急速に、絶え間なく且つ普遍的に起っている、という。歴史のあらゆる時期に言語の変化は常に起り、われわれの無意識のうちに眼の前で起っている。かれは言語の変化の原因を“方言の発生”と“音韻⁽⁸⁾衰頹”あるいは“方言の成長”と“音韻⁽⁹⁾変化”であるとし、多くの例証を挙げてこのことを強調する。

言語の変化を、かれは自らその研究に心血を注いだ Veda の、詩人たちの用語が如何に含蓄にとみ豊かで雄大であったか、その言葉の妙味が今や見る影もなく貧弱なきたない卑語になりはててしまったことに例をとり、Zend-Avesta や Behislûn の語、Virgil の語等が如何に変化したかと説く。未開の部族間ではこの変化が更にはげしく急速であることが、シベリア、アフリカ、シャム等における遊牧民を注意深く観察した結果から知られているが、それに反し、高度に文明化した国民においてはもっと固定していて、その言語が変遷する力を失ったのか疑わせることさえある、といっている。しかしこれは観察の結果到達したかれの結論で、これを一般的な説とするには今日の観点からみると客観的データに欠けている。

音韻変化が実際に起るのは主として方言の発生のおとであるが、その痕跡さえ必ずしも明らかでないことがある。*hawk* はアングロサクソン語の *hafoc* を、*lie* はアングロサクソン語の *licgan* と *lêogan* を仮定する。*diluvium* は変化して *deluge* に、*pipio* は *pigeon* に、*sapius* は *sage* になった。*salvia* と *sapius* がもはや弁別されることができないならば、それは衰頹である。この過程を衰頹とか変化、あるいは成長又は発展と呼ぼうと、われわれは非常に注意深くそれを方言の変化あるいは成長と区別すべきである、とかれはいう。同じ言語の異なる方言を較べてみると、方言のすべては相似ていて対応しており、どちらが先か後のものか区別できない。サンスクリット語の *dhâ* を、ギリシャ語では *tha*、ゴート語では *dâ*、高地ドイ

ツ語では *tā* というが、この例で分るように、サンスクリット語では *dh*、ギリシャ語では *th*、ゴート語（ラテン語、ケルト語等）では *d*、高地ドイツ語では *t* が対応している。そしてこの4つを1つの同じタイプの方言の多様性として考えるべきだという。これは Max Müller の説の主要な特徴で、折さえあればすべての方言形態の同時発生性を主張している。

もし言語がもともと意味をもつのが目的とされ、ある意味を伝えるのに必要なものだけをもっているならば、言語の内部に音韻の変化が起るなどということはその目的を自らやぶるものであろう。いくつかの言語にはこのことが起り、膠着語 (agglutinative)、屈折語 (inflectional) と区別して、孤立語 (isolating) と呼ぶ1グループを形づくっている。

英語で 10 を *ten* というのに対して孤立語のシナ語では *shī* という。*shī* (10) にほんの僅かな音韻上の変化でも加わると、もはや 10 の意を表わすことは不可能になる。もし *shī* の代りに *t'si* と発音すると 10 でなく 7 を意味する。10 の 2 倍即ち 20 を表わしたい時、シナ語では 2 の意味である *eúl* を *shī* の前につけ、*eúl-shī* という。*shī* に適用されたのと同じ注意が *eúl-shī* にも適用される。たった 1 個の文字を加えても落しても 20 ではなくなり、何か別のものを意味するか、全然何も意味をなさなくなる。シナ語のみならず単綴語 (monosyllable) といわれる他の言語においても全く同じである。チベット語で *chu* が 10、*nyi* が 2 で、*nyi-chu* が 20 であり、ビルマ語では *she* が 10 で、*whi* が 2 で、*whi-she* が 20 である。

英語、ゴート語、ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語など、サンスクリット系の言語において音韻変化の様子をみると、英語において *twoten* は許されず、ラテン語で *duo-decem*、サンスクリット語で *dvi-dasa* は用いられず、次の様になる。

梵	希	羅	英
vimsati	veikati ⁽¹⁰⁾	viginti	twenty

先づサンスクリット（梵）語とギリシャ（希）語とラテン（羅）語が同一の語からでたもので、外形の差異はただ地方的差であるということ、一方英語

の *twenty* はゴート語の *twai tigjus* (two decades) とアングロサクソン語の *twen-tig* (two ten) の複合語であるということ、そして Max Müller が方言の発生といていることの所産であることに気づく。

次にラテン語の *viginti* とサンスクリット語の *vimsati* の最初の部分の *vi* は、もと *dvi* であったものが *dvi* は発音しにくいので *vi* になったのである。ラテン語の2倍を表わす *bis* は英語の *twice*, ギリシャ語の *dis* と相対応し、*dvis* から出たものである。ギリシャ語の *dis* はラテン語の前置詞としても現われ、*a-two* の意味であり、*discussion* はもともと *striking a-two* (2つに打ち割る) の意で、*striking through and through* を意味する *percussion* に対するものである。*viginti* の後半 *ginti* の部分は英語の *ten* (10) にあたるサンスクリット語の *dasan*, 又は英語の *decade* (10の1組) にあたる *dasat* 又は *dasati* から出ている。しかしサンスクリット語の *vimsati* において *dasati* の最初の syllable の *da* が落ち、鼻音の *m* がこれに代って *vimsati* となったのは変則である。ラテン語 *vi-ginti* の二番目の syllable はギリシャ語の *εἰκασι* の *a* に該当する、とかれはいう。要するにラテン語の20を表わす *viginti* はもとは2と10を表わす2つの語が結合し変化(腐敗)してできた非常に古い語として受けとられなければならない。

シナ語の *eül-shī* (20) の様な語と、サンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語に見た様な語の間には音韻上でなく言語の特性において著しい差異がある。シナ語においては多過ぎもせず少過ぎもせず言葉自ら語り意味を遺憾なく表わす。サンスクリット語においては、これに反して一語を組立てる成分である部分がくずれ、遺ったものが結合して塊の様なものをつくり、それは非常に適確且つ綿密な分析が行われなければ説明され得ない。これが音韻的变化の一例であるといい、Max Müller は敢えて “phonetic corruption (音韻の腐敗)” と呼んでいる。

かれは更に音韻腐敗が文法形式に現われる例として、シナ語では *gin* (人) の複数には同類全部をさす語 *Kiai* (界) をつけて *gin-Kiai* となし、同族のチベット語でも総数を表わす *kun* や多数大勢を表わす *t'sogs* を附加して

複数を表わす。数詞もこの目的のために使われる。英語においても類似の複数があるが、それを文法上の形式として認めることはできない。この様に複数表示の語が実際にはっきり聞き分けられる間は音韻腐敗の現象が起ることはないが、しかし一度それを失うや、音韻腐敗が起り易くなり、音韻腐敗が始まると語の殆ど全部を変じ、人為的あるいは慣用上その部分的な残りをとどめ、やがてはそれも衰えて文法上の語尾の萌芽となるのである。音韻の変化は、この様にして孤立語を膠着語に、膠着語を屈折語に変えさせる大きな要素であった。

§ 4 言語の形態的分類

世界の諸言語の構造は多種多様である。音素の数とその体系、音節の構造、単語の音韻的構造等の音韻的特徴においても、形態的構造および構文法においても多様をきわめている。言語の分類において特に注意がはらわれたのは、この中で形態的構造である。

Max Müller は August Schleicher と同じ様に 3 分法をとっているが、⁽¹¹⁾かれのとは少し異なる。すべての言語を分析していくと最後に語根 (roots) に達する、という考から語根の結合のしかたで三つの段階 (three stages) があるという。⁽¹²⁾即ち 1) 語根が各々完全な独立性を保っていて、語の形と語根の形が同じもの——これを語根的段階 (Radical Stage) の言語といい、単綴語 (Monosyllabic) 又は孤立語 (Isolating) ともいう。2) 二つ又は二つ以上の語根が合して単語を形成し、この様な合成形式で一方の語根が独立性を失い単に語尾と化したもの——これを語尾的段階 (Terminational Stage) の言語といい、膠着語 (Agglutinative) ともいう。3) 複数の語根が合して単語を形成し、語根のいずれもが独立性を失うことのあるもの——これを屈折的段階 (Inflectional Stage) の言語といい、混合語 (Amalgamating) 又は有機語 (Organic) ともいう。

第一の段階では音韻上の壊れ (phonetic corruption) は全くない。第二の段階では主要語根には音韻の壊れはないが、語尾の部分にある。第三の段

階では主要語根にも又語尾にも音韻の壊れがあらわれる。言語は常に変遷してどの時代のものもその前後の時代の言語と全く同一でなく、この三つの段階の一つにじっと固定してしまっているようなことは殆どあり得ない、とかれはいつている。

シナ語に代表される第一の段階では単語各々が一つの語根でそれ自体の意味をもっている。シナ語では名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞の間に何ら語形上の区別がない。文中の語順位置によって、同一の語根が品詞の区別をあらわす。例えば

jen jin 仁人

jin jen 人仁

におけるように、名詞 *jin* の前にある *jen* はその名詞の修飾語である形容詞であるが、もし後に来る時は補語として述部的形容詞 (Predicative adjective) となる。ラテン語とシナ語を比べてみると、

}	ラテン語	baculo	with a stick
	シナ語	ḡ cáng	employ the stick
}	ラテン語	domi	at home
	シナ語	ũ- <i>li</i>	inside the house

この様な場合、シナ語の *ḡ* と *li* は前置詞、後置詞の様に使われているが、*ḡ* は 'to employ' の意を、*li* は 'inside' の意をもっていて、いずれも語根である。この様に単語の各々又はその一部分がまだ本来の語根の意義を失わないうちは、この様な言語を語根的段階 (Radical Stage) に属するといひ、言語発達の初期の段階に属するものである。もし *ḡ*, *li* が語源的意義を失って単に格を示す符号となる時、この言語は語尾的段階 (Terminational Stage) の言語といひ第二期に入りこんだものとする。第一期から第二期に移る言語の状態は一目瞭然としたものでなく、その境界線は複雑である。

シナの西方及び北方に、語根的段階をまさに脱しつつあるもの、あるいはその期を経過してしまったもので、殆ど完全なまで膠着状態に発展したものの、あるいは屈折語々法の域まで達しつつある諸言語がある。第二の段階に

属するものはチュラン (Turanian) 語族, 正確にはチュラン語類 (class) という大言語群で, その北方派はウラル-アルタイ (Ural-Altai) 語族, 南方派はデカン半島のタムール語 (Tamulic), チベットやギータンのボーターヤ語 (Bhotiya), タイ語 (Taic), マライやポリネシアのマライ語 (Malaic) から成る。第三の段階にはアーリア (Aryan) 語族, セム (Semic) 語族が属する。

チュラン語族はその多くの言語の中に, アーリア語族等の研究におけるように語族的類似性を見出すことはできず, 雑然としている。Max Müllerによれば, セム語族あるいはアーリア語族と全く異って遊牧民の言語 (Nomad languages) だからであるという。その方言変遷の速度も驚く程早く, 言語上欠くべからざる単語である父, 母, 兄, 弟, 親, 子という様な語さえなくしてしまつて, 同じチュラン語族の他の方言から同義語をもつて来ておきかえたものもある。又語法上の語尾も定まるところがない。チュラン語族のあるいくつかの語の数詞, 代名詞はある一つの語源に帰着することが明らかであり, いくつかの語根や単語においても, チュラン語族の最も遠い両極に共通なものが見出されるといわれる。

第二, 第三の段階のそれぞれの特徴である膠着語と屈折語の関係であるが, チュラン語族と印欧語族とくらべると混然としたところがあるという。膠着語は, それぞれの語の文法において conjugation (動詞活用) を示すために代名詞が動詞と膠着し, 又 declension (格変化) を形成するために前置詞を名詞に膠着させるのであるが, チュラン語族にあつては, このことは顕著な特徴とならない。サンスクリット語, ヘブルで語は conjugation も declension もあるが, チュラン語族においては殆ど認められることがない。チュラン語族を特徴づけているのは, 語尾 (termination) が常に独立語として有意義の力をもっているが, 付加された語根から区別し, modificatory syllables (テニヲハの様なもの) としてである, ということである。

第三の段階に属すとされるアーリア語族における declension と conjugation という語の変化も, 同じようにもともとは膠着の作用によって表現さ

れた。しかしその構成部分が早くも融合しはじめ、一個の完全な単語を作り、その間音韻上でも融合の現象をみせて、ついにはその単語のどの部分が語根でどの部分が限定的要素 (modifier element) であったか区別できなくなってしまった、というのがアーリア語族生成の通則である。Max Müller はアーリア語族とチュラン語族との区別を、モザイクを例にとって、アーリア語族の単語は1片からできているが、チュラン語族の単語は数多の小石がセメントでつけ合わされ、そこに貼合わせのあとや裂けめをはっきり示している、と表現している。

§ 5 Max Müller の言語学史上における位置

広汎にわたって多彩な研究をした Max Müller の業績のうち、言語学に関する主な意見を以上素描してみたが、これを言語学史という流れのなかで見直してみよう。

19世紀初期にはドイツの言語哲学者 Wilhelm von Humboldt (1767—1835) が「言語は *ergon* (作品) ではなく *energeia* (活動) だ」といって、言語を動的な現象として定義し、それまでの一般的特色となっていた通時論 (diachrony——言語の歴史) に固執せず、むしろ所与の一時点における言語資料の解明、つまり共時的 (synchronic) 断面における具体的言語事実に対する考察、分析を行った。このことによって言語の普遍的・論理的構造を求めようとする18世紀の学問的伝統は断ち切られることになった。中期には生物学の分野で Charles Robert Darwin (1809—82) が種の起源・進化について画期的な理論をうち出したが、この見解が当時他の分野にも影響を及ぼし、言語学にも August Schleicher によって導入された。かれは進化論を適用して、言語をそれ自体生命のある有機体になぞらえる思想を唱導した。末期には少壮文法学派が言語の心理活動としての面に注目し、既に確立されていた史的比較方法に厳密性を与えた。

上述のような事情の中で、Max Müller は言語の本質に関して Schleicher の影響を受けていた。言語に生命ある自律的有機体としての特性を認めない

点においては Schleicher と考を異にしていたが、言語と思考が同一である
と考える点、言語の変遷を歴史的事象としてではなく自然現象に共通な成長
過程とみる点等において、Schleicher と一致していた。かれより一步進ん
で、言語と思考との直接のつながりを話しことばの現象にもとめた点は、
Max Müller の積極的な成果である。

言語が変遷する時、必然的に音韻の変化を伴うが、この音韻の変化は一定
の法則に従って起る。このことは既に Jacob Grimm (178—1863) がかれの
Deutsche Grammatik vol. 1 第2版 (1822) において、ゲルマン諸語とそ
の他の印欧諸語との間の子音の対応を Lautverschiebung (音推移) と呼ん
で、次のように体系的に提示した。

ギリシャ語	p	b f	t d th	k g ch
ゴート語	f	p b	th t d	h k g
高地ドイツ語	b(v) f	p	d z t	g ch k

この子音対応の法則は言語学では Grimm's Law の名で知られている。実
はこれは殆ど Rasmus Kristian Rask (1787—1832) の発見によるもので、
ただ一ヶ所誤って b→b としたのを Grimm が b→P と訂正しただけ（と
いっても非常に有意義であるが）であった。はからずも Max Müller が誤
解に基いてこう命名をしたといわれている。Max Müller はこの法則にの
っとって音韻衰頹と方言発生または音韻変化と方言成長の区別をしている。
しかしかれのこの区別はそれ程重要ではなく、この術語を生む根拠となりし
かもかれが名づけた Grimm's Law が、多少事実をはなれてまで図式化し
た欠点はあっても、音韻変化に一貫した規則性のあることを人々に気づかせ
た点、その意義は大きい。やがてそのあとに出現する少壮文法学派の人たち
によって音韻法則の例外を生ぜしめる原因について周到な考察がなされ、特
に注意すべき2つの現象——「類推」という心理作用と、近い親類関係の他
の言語や方言からの「借用」——が明らかとなる。

この様に折角 Max Müller が Grimm の法則に注目していながら言語の
史的変遷について適確な観念を得ることができなかったのは、かれが言語を

自然法則に支配されるものとしてとらえていたため、言語はわれわれが生後習得する社会習慣であるということに気づいていたならば、その認識も洞察も更に深いものとなっていたであろう。

殆ど同時代同じ分野で活躍したアメリカの言語学者 William Dwight Whitney (1827—94) との1874年から1892年にいたる長い間の論争は有名であるが、Whitney は言語を相互理解のために歴史的に生成発展させた人間的制度と考え、言語は人間の意志で用いられ、又同時に個人の意志をはなれたシステムであることを予見していた。そのような立場の相異から、Max Müller の言語観、音韻変化について、又進化論的形態的分類、言語起源説などについて、Whitney は全く否定的な議論を展開し、枝葉末節的な箇所⁽¹³⁾にいたるまで痛烈な批判を行っている。

Max Müller は、言語観が Whitney 以後の言語観へと変遷するまさに過渡期の、いわば言語観の揺らいでいる時代にあって、折から覚醒の思想といわれた Darwinism の洗礼を受けた。進化する自然現象としての枠組の中では、言語の変遷、形態的分類等における研究にもおのづから限界があり、枠の外の条件や原則を導入して独創的な展開を試みることができなかつた。しかしサンスクリット語の分野におけるかれの足跡は特記されるであろうし、様々な印欧諸語については、その広い知識から詳細な情報を提供し、集められた資料に比較方法の立場から評価を与えた。くりかえしていえば、帰化したイギリスに大陸の比較言語学を始めて紹介し発展させた功は大である。また、冒頭にふれたわが国の二人の博士への Max Müller の影響とその後のわが国の言語学発達へのかれの微妙な影についての検討は、今後の課題であろう。

注 1) Max Müller 歿後、その蔵書全部を岩崎久弥氏が買収して1901年6月東京大学に寄贈した。ドイツからも買収の申出のあったのを、南條・高楠両博士の様な門弟を有し平素日本に関心をもっていた縁で、特にわが国に譲られた。言語、宗教、哲学、神話、歴史に関する12,000冊の本から成り、Max Müller 自ら注記したものが大部分を占める。年代的には *Rig-Veda* に溯り、印度古聖典全集

の出版に用いた一切の資料, Sāyana の著書全部の謄本等, 古写本, 専門書類, 古版書類, 稀書が多かった。舶載後 22 年を経て関東大震災で東大図書館とともに焼失。現在は焼け残った 2 通の Max Müller 宛の手紙が関係文書として保管されているだけである。

堀 謙徳「マクス・ミュラー文庫解題」

『東亜の光』 4 卷 12 号 明治42.12 132—135頁

5 卷 1 号 明治43. 1 133—134頁

5 卷 5 号 明治43. 5 151—154頁

5 卷 6 号 明治43. 6 140—141頁

『東洋学芸雑誌』 18 卷 273 号 明治34.6.25 253—255頁

『岩崎久弥伝』 昭和36. 280—285頁

- 2) 笠原研寿氏は過労のため病を得, 南条博士より 2 年早く 1882 年に帰国し, 間もなく歿した。32 才であった。
- 3) Max Müller が 1861 年と 1863 年に Oxford 大学 Royal Institution で行った講義を本にしたもの。2 vols. London, 1861 & 1863. New edit. 1890. 尚本文引用は 1891 年版によった。以下 *L. S. L.* と略して引用する。
- 4) Schleicher, August, *Die Darwinische Theorie und die Sprachwissenschaft*, Weimar, 1863. p. 7
- 5) *L. S. L.*, i, p. 29
- 6) *Ibid.*, i, p. 46
- 7) *Ibid.*, ii, p. 83
- 8) *Ibid.*, i, p. 47
- 9) *Ibid.*, ii, p. 183
- 10) *εἰκοσι* に対する古典ギリシャ語ラコニック方言
- 11) August Schleicher (1821—68) は Hegel 哲学の影響の下に, 単語の機能は意味 (*bedeutung*) と関係 (*beziehung*) とから成り, それらを表わす手段によって諸言語は 1) 孤立語 (*isolierende sprachen*), 2) 接合語 (*zusammenfügende sprachen*), 3) 屈接語 (*flectierende sprachen*) の 3 つに分類することができるという, 又言語の生成を 3 期に大別した。即ち, 1) 言語の発達して来た先史時代では, より単純な言語形式からより高い言語形式が生じた——孤立語から接合語が, 接合語から屈折語が生じた。2) 歴史時代では, 音と形式における言語の衰亡が起り, 当然機能と文構造に変化があった。以上の様に Schleicher は分類し, その後もこの分類法はかなり広く支持され有力なものとなった。
- 12) *L. S. L.*, i, pp. 390—405
- 13) Darwin, G. H., “Prof. Whitney on the Origin of Language,” *Contem-*

porary Review vol. 24, November, 1874. pp. 894-904

Max Müller, F., "My Reply to Mr. Darwin," *Contemporary Review* vol. 25, January, 1875. pp. 305-326

_____, "Light, Delight, Alight," *Academy* January 8, 1876. p. 34

_____, "A Lecture in Defence of Lectures," *Chips from a German Workshop* vol. I, N. Y. Scribner, 1898 (reprint). pp. 173-193

Whitney, W. D., "A Rejoinder," *Academy* January 1, 1876. p. 11

_____, *Max Müller and the Science of Language*, a criticism. N. Y., D. Appleton & Co., 1892

"Müller's Chips from a German Workshop," *The Nation* March 23, 1876. pp. 185-197

"London Academy and Prof. Whitney," *The Nation* March 30, 1876. pp. 208-209

- 14) 当時、特に18世紀の哲学者の間で信じられ、多くの学者によって支持された言語起源に関する二つの説があった。人類言語の構成要素、即ち語根がどんな内的心理相と相対応するのかを解明するための仮説である。一つは Herder などの主張で擬音と語根の関係を説いたもので、鳥獣の声、雷の轟き、波の音、小川のせせらぎ、風のささやき等の自然の音響をまねて、ここから多くの言語が生まれて出てきたというものである。もう一つは Condillac 等の哲学者が主張したもので、快苦恐悦の際に自然に発する音そのまま、言葉になったもの、例えば漁夫たちが網を曳く時の様に協同して働く一団の人たちが無意識に発する間投詞から起ったというものである。Max Müller は第1のものにバウワウ説 (the Bow-wow Theory)、第二のものにホーホー説 (the Pooh-pooh Theory) というおどけた名前をつけ、友人の Noiré 教授がこれを唱導するのを支持した。

言語にはこの種の起源を有する要素が含まれているが、記号の膨大な体系である言語の発生をこれらの説は合理的に説明するものではない。人類言語が一元にさかのぼるのか多元に由来するのかを比較方法で科学的に明らかにすることは現在不可能ということになっている。しかし言語起源は誰でも興味をいだく問題で、これまでに種々の臆説が出されている。